

---

# 理想郷

ふー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理想郷

### 【Nコード】

N8959C

### 【作者名】

ふー

### 【あらすじ】

4つの部族が協力して生活する「長陽城」。そこで旅をしてきた2人が見たものは…！？ オンラインゲーム「飛天オンライン」の二次創作小説です。

## 1話 2人の旅人

四方を城壁に囲まれた長陽城。

そこはたくさん種類の種族が集まる場所だ。

人族、天人、修羅、鏡童。

それらが協力して暮らす理想郷に、また1人、いや2人の旅人が足を踏み入れようとしていた。

「ねーえー」

「んー？」

「つーかーれーたー」

「はいはい」

「水うう〜…」

青い髪の少女と、銀髪の少女だ。

ちなみに、水が飲みたいと駄々をこねているのは、杖にしがみついで座り込んで

しまっている青い髪の方だ。

「もうすぐ着くから、我慢する！」

「我慢できないい〜」

「じゃあ、置いてっっちゃうけど？」

「あつう〜」

無駄と解つたらしく、我が儘を言うのを辞めて、青い髪の少女が立

ち上がった。

「あとどれぐらいなのさ？」

「あとは…」

銀髪の少女が荷物から地図を出し、辺りを見回した。

「いま…ここだから…あと少しだよ！」

確かに、もうそこまで距離は無かった。

凸凹した道と、かんかん照りの太陽のせいで先が長く感じてしまうのであろう。

3

「ほれ、歩く歩く！」

「はあ〜い…」

だらだらと流れる汗を法衣の袖で拭いながら、2人は歩き出した。

「ついたああああ…！！！！！」

門の前で入国手続きを済ませ、2人は夢にまで見た長陽城に着いた。

「じゃあ早速、宿屋の手配…」

「水う!!!」

「…わかったよ…」

入り口でもらった地図をたどり、2人は旅館へ向かった。

着いてみると、そこそこ大きな旅館で、料理屋も経営しているらしく、フロント

の向かいに店が設置されていた。

「今日からしばらく…ええ、お金はありますから」

銀髪に部屋のことを全て任せ、青い髪は、カウンターに置いてあるメニューを穴が空くほど眺めていた。

「おまたせ、部屋とれたよ」

「じゃあじゃあっ! ジュース飲んでいいっ!?!」

目をキラキラと輝かせながら青い髪は言う。  
財布を確認してから、銀髪が口を開いた。

「…今日だけなら」

「やったあ！」

その時だった。

「ほーら、ちよつと退いてね、おチビさん。」

2人は、フロントから剥がされ、後から来た金髪の男に割り込まれてしまった。

「ちよ、ちよつとお！！！」

足でも踏んでやろうかと男の足元を見ると、床から数センチ浮かんでいた。

天人の特徴で、天人は下に足を付かず、少し浮かんだ状態で生活をするのだ。

知識溢れる優雅な部族と言われているが、そんな雰囲気は微塵も感じられなかった。

「割り込みとか、やめてよっ！感じ悪いなあっ」

「え？並んでたの？悪いねえ」

べつやら悪気は無いらしい。

しかし、チビと言われたのが相当気に入らないらしく、青い髪は憤慨した。  
銀髪はというと、「いつものこと」というような感じで、男の後ろに並び直している。

「大体、初対面のレディにチビとは何よ、チビとはあつ!!!!」  
「れ……………ぷっ」  
「笑うなああつ!!」

があがあと怒る青い髪。  
実は、青い髪も銀髪も、普通の人間、「人族」ではなく、この世界を統治する12  
人の王、「鏡王」の補佐役として、古代から由緒ある種族、「鏡童」なのだ。  
童の文字通り、姿は子供そのものであり、中身がいくら年をとろうと、外見は永遠に子供のままだ。

「私は鏡童なの!!きよ・う・ど・う!!……」  
「ちよつと!いい加減にやめなさいよ!」

見かねた銀髪が止めに入った。  
気が付くと、旅館の客が全員、青い髪を見ている。

「ほら…もう部屋に…」

これ以上、事を荒立てぬよう、銀髪が青い髪 of 法衣の袖を握った。

「…アンタ名前は？」

「え？」

「アンタの名前聞いてんのっ」

青い髪が、まっすぐな翡翠色の瞳で、先の天人を見つめた。

「俺は…シルティ」

「シルティか…次会ったときのために聞いてよかった」

そのまま青い髪は、荷物を持ち直し、銀髪に連れられて、部屋に行くつもりだった。

「俺に名前聞いたんだし…お嬢さんも答えないとねえ…」

「お嬢…!？」

先程の扱いとのギャップに、青い髪は鳥肌が立った。

「一流のレディには、さぞ素敵な名前があるんだろう？」

(気持ち悪っ…)



そうは思ったが、流石に口には出さない。  
とりあえず、名前をさっさと言って、ここから離れようと思った。

「…紫音…だよ」

「へえ…可愛い」

やっとのことでここまでできたのに、いきなり事件を巻き起こしてしまった。

このことが長陽城中に広まりでもしたら…と紫音とシルティのやりとりの間、銀髪は悩んでいた。

8

「あと…そっちのお嬢さんは？」  
「え？」

銀髪が顔を上げた。

「な…ま…え」

「…威閻です…」

「紫音に威閻…何食いたい？」

「…え？」

シルティは財布を出して中身を確認している。

「さっきのお詫び」

威閻は、初対面の人間にそんなことをさせるわけにはいかないと思  
い、断ろうと  
した。

「あ…私達はそんな…」

『ぐづぐづうう』

「……」  
「……」

見事な腹の虫が鳴った。

「好き嫌いとかアレルギーとかねえか？」

「……無いです……」

そうかそうかと微笑みながら、シルティと共に、2人はフロントか  
ら回れ右をし

た。

## 1話 2人の旅人（後書き）

はじめまして。「ふー」ともうします。

ただの趣味だったオンラインゲームにハマり込み、オリジナル小説を執筆するまでに至ってしまいました…（笑）  
拙い文章ですが、これからもよろしくお願いいたします。

## 第2話 兄弟

フロントから料理屋に移り、席を取ると、シルティが適当に料理を注文した。

「す、すみません…」

「いやいや、色々気になったしね」

「？」

お冷やを飲んで感動する紫音を見た後、威閻は自分の身なりを見直した。

「あ、外見的な意味じゃなくて…」

「え？」

「それだよ。杖」

「杖…？」

飲みきつただけの水では足りないのか、氷をポリポリとかじる紫音の足元には、ここに来るまで「疲れた」の「もう歩けない」のだとしがみつきながら一緒に歩いてきた杖がある。

「見せてもらっていい？」

「ろーぞお」

氷の入った口でモゴモゴと返事をすると、紫音は杖をを渡した。空色を基調とした、少し砂が付いているが綺麗な杖だ。

「へえ…いい杖だ」

「そらどーも」

シルティはずっと杖を見ている。

「…術師なのか？」

「そーだよお」

「つてか紫音。口に物入れて喋るのやめなよ」

「んー、次回から気を付けます」

パリポリと最後の氷を噛み砕きながら、紫音が言う。

「術師…ねえ」

「え？」

「いや…こんな小さ」

「怒るよ？」

「…ハイ」

「お待たせしました」

長めの茶髪ウエイターが料理の乗った皿を持ってきた。

「ありがとうございます」

律儀に礼を言う威風。

ウェイターから皿を受け取り、置くのを手伝った。

「じゅっくりどうぞ」

ニコニコと綺麗な笑みを張り付けたウェイターの手には、銀色の灰皿があった。

「に・い・さ・ん」

『ガンツ！！！』

「うおおああ…！」

頭が割れるのではないかと思うほど強く響く音がした。

ウェイターがシルティの頭を灰皿で叩いたのだ。

相当痛かったらしく、シルティは頭を押さえて悶えている。

「なっにすんだ！ディーター！！」

「兄さんこそなにやってんだよ！店サボりやがって！泥棒にでも入

られたら兄さんのせいだからな!!」

「貴様！兄貴にその口の聞き方はなんだ!!命令するな!!」

「うっさいわ!!」

先程の喧しさが戻ってきた。

「兄さんってことは兄弟なの？」

完全に料理しか見ていない紫音が聞く。

2人は言い争いを辞め、質問にこたえた。

「ああ。俺が兄貴で」

「僕が弟なんです。」

「ほえー」

驚いている紫音の隣で、威嚇は気付いた。

シルティとディーダの種族が全く違っている。

シルティは天人。ディーダは人族。

兄弟ならば一緒のはずだ。

しかし、そんなことは初対面の人間が口を出すようなことではないと、黙っておくことにした。

「お2人とも見ない顔ですね」

「今日来たばかりなんだってさ」



殴られたところを擦りながら、シルティが答えた。  
「どうやらかなり響いたようだ。」

「ディーダさんがここで働いてるってことは…シルティもここで仕事をする？」

割り箸を割りながら、完璧に胃をスタンバイさせている紫音。  
「もちろん、料理しか見ていない。」

「いえ、ここでは雇ってもらってるだけで、本業は武器屋してるんですよ」

「武器屋…」

威閤が、ガサガサと地図を出し、武器屋を確認した。

「あ…ここですか？」

「小さい店でしょう？」

苦笑いしながらディーダが言う。

「じゃあ…弟君に見つかったってことで、俺は戻るよ」

シルティは立ち上がりながら財布を開け、代金をぴったり出した。

「あ、足りないよ兄さん」

「え？ぴったり出したぜ？」

「灰皿代」

「……………」

「くっはー！食った食った！」

「あんたは本当に言葉汚いな……」

「タダ飯最高お〜」

ベッドでゴロゴロと転がる紫音に、威閻は呆れている。

「ねーねー威閻」

「ん？」

「武器屋いってみてもいい？」

「ああ…シルティさんこの？」

「うん」

紫音は全く、少し緩んでいた帯を付け直し、料理を食べるのに邪魔だと、結わえた髪をほどき、靴を履きなおした。

「私、荷物片付けるから、暗くなる前に戻ってくるんだよー」

「はいはい、いつてきまーす」

武器屋は旅館の向かいにあるので、直ぐに着けた。

「こんにちは……あれ、いない」

ドアの無い店の中は、外からの光しか入らず暗い。

キヨロキヨロと見回してみたが、店に戻ると言っていたシルティはどこにも居なかった。

「シルティー？」

カウンターに向かって呼んでみたが、返事はない。

「おかしいなあ……」

少し待つて戻らなかつたら明日来ようかと考えていた時だった。

「はいはい、お待たせしまし……なんだ紫音か」

「なんだとはなんだよあ」

店の奥から出てきたシルティは、がっかりしたようだった。

「何？俺の勇姿を見に来たの？」

「いや、武器を見るに」

「冗談でもハイって言えよなあ…」

どうやらついさっきまで作業をしていたらしく、シルティは分厚い手袋をしていた。

「武器作ってたの？」

「ああ、役所の人から剣を頼まれててね」

「へえ」

紫音は、手近に飾られた剣を見た。

綺麗に加工され、刃だけでなく持ち手まで輝いて見えた。

「綺麗…」

「魂込めて打ってんだから当然！」

シルティは自慢気に答えた。

「シルティって以外に熱い人だねえ」

「頭はクールに、心は熱く！」

「…どっかで聞いたような台詞だ…」

しばらく、旅の話をしていたが、シルティの目は、杖に釘付けだった。

「そんなにいい杖？」

「うん。作り手の気持ちが伝わってくるみたいだ」

「なんて言ってるのかわかるの？」

「比喩的表現を正面から受けとるなよ…」

しばらく2人は自分たちの話をした。

「シルティはどうして長陽城に？」

「あ…」

答えにくそうにシルティが口を開いた。

「母さんを探してるんだ。4つの部族が協力して生きてるここなら見つかると思っただけだ…」

「そう…なんだ」

「デューダ。見ただろ？」  
「うん」

シルティは煙草を出すと、火を付けて吸い始めた。

「デューダは…腹違いの弟なんだ」  
「へえ…」

これ以上詮索するのは、いけない気がした。

「俺…おかしいのかな…紫音にこんな昔の話なんか…」

苦笑いしながら、ふうつと煙を吐いた。  
その苦笑いする表情も、デューダにどこか似ていた。

「似てるね」  
「え？」  
「私もお母さんいないんだよ」

紫音はシルティの目を見た。

「シルティ見てたら思い出したんだ」

「…お前のお母さんを…」

「目がね、そっくり」

なんでだろうね、と笑う紫音。

「………なんでかねえ………」

シルティは、最悪の場合を考えてしまい、煙草の煙と共に、外へ吐き出した。

『もしも同一人物であったら』

## 第2話 兄弟（後書き）

さて、話がややこしくなってます…w

異母兄弟設定とか大好きです（殴

ねじれた人間関係の妄想が趣味です（もうやめて



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8959c/>

---

理想郷

2010年10月15日21時47分発行